「最高法院で裁きを受ける」　2023年11月24日

夜が明けると、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちが集まり、イエスを最高法院に連れ出して、「お前がメシアなら、そうだと言うが良い」と言った。イエスは言われた。「私が言っても、あなたがたは決して信じないだろう。私が尋ねても、決して答えないだろう。しかし、今から後、人の子は力ある神の右に座る。」そこで、皆の者が、「では、お前は神の子か」と言うと、イエスは言われた。「私がそうだとは、あなたがたが言っている。」人々は、「これでもまだ証言が必要だろうか。我々は本人の口から聞いたのだ」と言った。（ルカ22：66～71）

主イエスはオリーブ山で捕縛され、大祭司の家に引いて行かれた。主イエスを拘束していた者たちは、侮辱の言葉を投げかけ、打ち叩いた。更に、目隠しをして、「お前を打ったのは誰か、言い当ててみろ」と叫んだ。あらん限りの愚弄の中で、鞭打たれ、多大な出血を見たであろう。

朝を迎えた。長老、祭司長、律法学者たちが集まり、主イエスを最高法院に連れ出した。最高法院は長老、祭司長、律法学者たち、71名で構成されるイスラエルの最高議会である。著者ルカは、明け方、最高法院が公正に開かれたように書いている。

マルコ福音書は、主イエスが大祭司の庭に連行後、そこに長老、祭司長、律法学者たちが集まり、深夜に、主イエスに対する尋問がなされたと書いてある。ここには、最高法院を構成する議員が集まっていただろうが、大祭司（私邸）の庭、しかも、真夜中の裁判などはあり得ないので、律法に基づいた正式な最高法院が成立しているとは言えない。しかし、裁判の形は取っている。主イエスに対して、神殿を冒涜したとの不利な証言がなされたが、証言が合わず、罪に定めることができなかった。不利な証言を受けても、沈黙を守る主イエスに、大祭司はいら立ち「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と尋問した。それに対し、主イエスは「私がそれである。あなたがたは、人の子が力ある方の右に座り／天の雲に乗って来るのを見る」と答えられた。これを聞いた大祭司は衣を引き裂き、「これでもまだ証人が必要だろうか」と煽った。人々は、自分を神の子、メシアとした冒涜罪で死刑にすべきだと決議した。これは、最高法院の会議を逸脱した貶めるためのリンチ裁判である。最高法院は何としても、主イエスを葬り去りたかったので、強引に冒涜罪を宣告したかったのである。この筋書きは一貫しており、理解できる。その後、夜が明けて最高法院全体で協議したと記している。

著者ルカは、正式な最高法院が開かれたが、神殿冒涜に関する尋問は省略され、「お前がメシアなら、そうだと言うがよい」の問いから始まっている。主イエスは、「私が言っても、あなたがたは決して信じないだろう。私が尋ねても、決して答えないだろう」と、禅問答のような会話がなされている。主イエスは続いて、「しかし、今から後、人の子は力ある神の右に座る」と、ダニエル書のメシア像を語られた。これを聞いて、議会は、「では、お前は神の子か」と問うと、主イエスは、「私がそうだとは、あなたがたが言っている」と、明言されていないが、否認もしていない。議会は、「これでもまだ証言が必要だろうか。我々は本人の口から聞いたのだ」と言い、自分を神の子とする冒涜の言葉を発したと受け止めた。著者ルカは、主イエスが冒涜罪で、死刑の宣告を受けたとは書いていない。彼の関心事は、最高法院の裁判より、ローマの総督ピラトの尋問と判決に重点が置かれているからであろう。